

天達忠雄『幽囚の歌』に描かれた 空爆下における一市民の生活

——「短歌」と「花」に焦点をあてて——

渡 邊 かおり*

はじめに

『幽囚の歌』とは、天達忠雄が警察署及び拘置所で詠んだ短歌1,009首を、天達の妻・文子が編集作業を行い、1965年に私家版として出版した短歌集である¹⁾。天達は1943年11月16日に、勤務先の社会事業研究所の同僚であった重田信一とともに、治安維持法違反容疑で検挙された。天達と重田の検挙に先立つ1943年5月26日に、同僚の浦辺史も同容疑で検挙されていたが、この3名の検挙のきっかけは1942年夏に秋田県旭村で農村調査を行ったことであった²⁾。警察署に連行された天達は、その後起訴に伴い拘置所に移送され、予審が行われないうちに戦後、1945年10月9日に釈放された。この2年近く囚われていた間に、天達が作り続けた短歌が『幽囚の歌』である。

天達は『幽囚の歌』の記録について、「いわば、『空爆下における一市民のある生活』とでもいうべきもの」と説明している³⁾。本稿では、天達が警察署や拘置所で作り続けた短歌を内容ごとに大別した上で、社会事業の研究を行い、思想犯として投獄された天達が、太平洋戦争末期の獄中において、どのように生きようとしていたのかについて検討を行う。なお、本稿で引用した短歌については、詠んだ日及び場所、『幽囚の歌』における何番目の歌かを示す便宜上の番号を振って、章ごと（3章のみ節ごと）に表に示してまとめている⁴⁾。

1 『幽囚の歌』の概要

『幽囚の歌』は大きく分けて、「豚箱の歌」、「独房の歌」、「文子のノートより」の3部から構成されている。ここではまず、それぞれの項目について概要を確

認する。

(1) 豚箱の歌

「豚箱の歌」には、天達が淀橋警察署にいた1943年11月16日から1944年5月28日までの時期に作られた短歌195首がまとめられている。淀橋警察署の留置場（監房）について、自らも入った経験のある風早八十二は、「あそこはいつも大繁盛、時には一房内、二〇名をこえる有様である」と述べている⁵⁾。実際に天達は、四畳半の監房に「十四の客人^{まらうど}」があつて寝るのも苦しいと詠んでおり、ひどい密集状況であった⁶⁾。また、留置場は、「通常各警察署の地下室に設けられており、入口からまっすぐ廊下を間にして左右に向かいあつた数個ないし十数個の『監房』もしくは『房』といわれる部屋から成り立って」おり、「便所は廊下の突き当りにあるが、ちゃんとした洗面所はない」という環境であった⁷⁾。天達は、監房の共用タオルは垢じみて拭くとおいが顔に残るため、生まれて初めてパンツで顔を拭いたと連作で詠んでいる⁸⁾。

そして、監房においては、新入りは便器のそばをあてがわれていた⁹⁾。また、風早も、「大の男は折り重なっても横になる余地はなく、新入りは壁ぎわに立たされたまま夜を明かす」と述べている¹⁰⁾。つまり、多数の人が押し込まれる監房において、新入りはより厳しい環境におかれたのであった。天達が短歌をちり紙に書き始めたのは、検挙されてから約1か月経ってからであるが、それは取り調べ等で気忙しかったことだけが理由ではなく、新入りとして置かれた環境の悪さも背景にあったと考えられる。その後、監房に入って70日が経過した頃には、天達は監房の「主^{ぬし}」となっており、短期間で人が入れ替わっている様子もうかが

える¹¹⁾。

このように、淀橋警察署の監房は不潔で、横になって寝るのも困難な狭さであり、苦しい生活ではあったが、気晴らしという意味では、同じく監房に入っている人々（同囚）と会話することは可能であった。時には、同囚が隠し持っていたタバコを勧められて吸うこともあったが¹²⁾、許可なく手紙を出した者がいたためにとばかりを食うこともあるなど¹³⁾、監房においては生活のほぼすべてを他者と共有する日々を過ごしていた。そのため、「豚箱の歌」には同囚とのエピソードも多くみられる。

天達が短歌を詠み始めたのは、1943年12月13日からであり、月別にみると、「豚箱の歌」全195首のうち、43年12月に75首、44年1月に60首と最初の2か月で約7割の短歌が詠まれている（図1）。新入りとしての生活も落ち着き、短歌を弁当箱にかくして外に出すという方法を考えた上で、万年筆を使うことが許されていた監房の中で、それまで心の中で温めておいた短歌をちり紙に一気に書いていったのであろう。

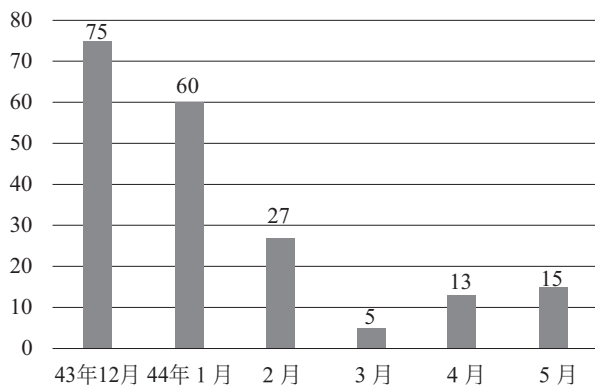


図1 「豚箱の歌」短歌数（1943年12月～1944年5月）

出典：『幽囚の歌』をもとに筆者作成（単位：首）

(2) 独房の歌

「独房の歌」には、天達が巣鴨拘置所及び豊多摩刑務所にいた間に詠まれた814首がまとめられており、時期ごとに「独房の秋」、「凍る鉄窓」、「繋がれし春」、「死の家」というタイトルがつけられている¹⁴⁾。天達は1944年5月29日に淀橋警察署から巣鴨拘置所に移され、7月3日に起訴されることとなった。巣鴨拘置所には思想犯が多く囚われており、天達も社会事業研究所において、左翼グループを形成して左翼の啓蒙を行ったこと等を理由に、思想犯として起訴されたのである¹⁵⁾。巣鴨拘置所に移った天達は、昼三疊ほどの独房で生活を送ることとなった¹⁶⁾。

巣鴨拘置所には刑が確定した「既決」と、まだ刑が確定していない「未決」とがあり、既決には労役が課せられたが、未決には労役はなかった。また、未決の場合は拘置所の図書室が管理している官本を借りることや、冊数や内容に制限はあるが、雑誌も含めた書籍の差し入れなども受け取ることができた。だが、独房では万年筆を使うことは認められていなかったため、天達は監房にいた頃のようにちり紙に短歌を書くということはできなかった。そこで、天達は研いだ爪で週刊誌の文字を抜き取り、米粒を糊代わりにして紙に貼り付けて短歌を作り始めた。これが「独房の歌」である。後述する通り、天達はこの作業を「印刷」と呼んでいたが、その「印刷」が始まったのは巣鴨拘置所に移動して3か月以上が経過した後の、1944年9月6日からであった。

巣鴨拘置所に移った後、「印刷」が始まる前までの時期については、「独房の歌」に短歌とともに掲載された、天達が妻の文子や父の弥七に宛てた手紙で状況を確認できる。1944年6月22日付の文子宛ての手紙では、起訴の正式通知がまだない中で、「私もこんなことになるうとは思わなかったものですからこれからの経過と結末についてはまるで見当がつかないで困っています」と起訴されることについて、戸惑いながら説明を行っている¹⁷⁾。それと同時に、予審判事による調べが始まるまでは何もすることがないので、「週刊朝日（又は週刊毎日）」の差し入れをリクエストしている。天達はその後の手紙でも、週報、写真週報、アサヒグラフなどの雑誌や書籍の差し入れを求めている。そして、これらの雑誌の記事を読んだ後に、文字を爪で抜き取り、米粒を糊として雑誌の他の頁に貼り付ける「印刷」を考案し、秋になってようやく短歌を作るに至った。この「印刷」された短歌について、文子は「差入の羽織の衿に縫いこんで（恐らく針金で作った針で）検閲の目をのがれたもの」と説明している¹⁸⁾。

その後、天達は1945年7月7日に巣鴨拘置所から豊多摩刑務所に移された後も独房で势力的に創作を続け、1945年9月27日の最後の「印刷」までの間に、814首もの短歌を詠んでいる¹⁹⁾。「独房の歌」は「豚箱の歌」と同様に、巣鴨拘置所及び豊多摩刑務所という新しい環境に移動して間もない時期に、比較的多くの短歌が詠まれている（図2）。とりわけ最も多い月は1945年7月の141首であり、この月には拘置所において亡くなる者が続出している様子や、重ね着しても

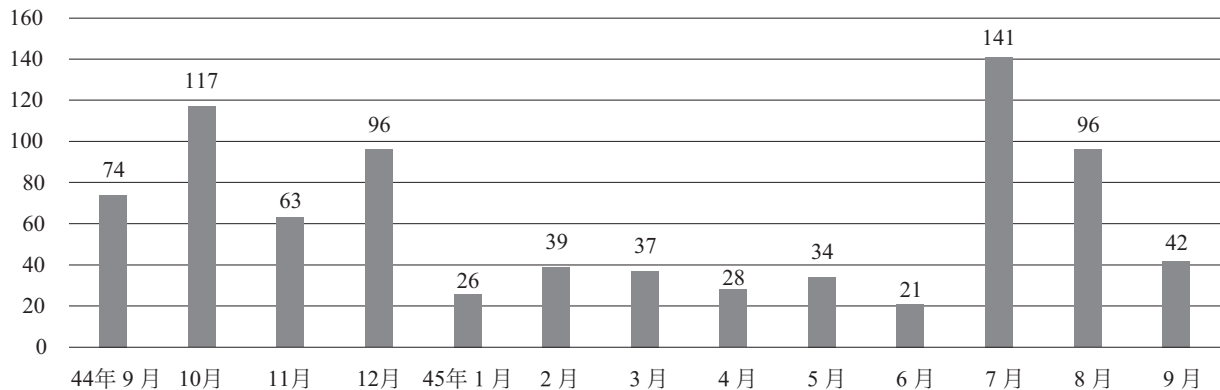


図2 「独房の歌」短歌数（1944年9月～1945年9月）

出典：『幽囚の歌』をもとに筆者作成（単位：首）

※45年3月30日の直後に掲載されている短歌の日付は3月3日となっているが、4月3日の誤植とみなし、4月分としてカウントしている。

寒いほどの冷夏、空襲の激化などについて詠まれている。万年筆すら使えないより困難な状況になって、そして自らの生命の危機が迫る中で、天達の創作は一層進んでいったのである。戦争末期の極めて乏しい食糧事情の中で、命をつなぐために一粒も無駄にすることの出来ない大切な米粒を糊にして作られた「独房の歌」は、まさに天達が命懸けで詠んだ歌であった。

(3) 文子のノートより

「文子のノートより」は、天達が検挙される前日に、天達が社会事業研究所における調査出張で留守の中、午前6時に天達の下関の友人U（後に刑事と判明）と称する中年の男性が自宅を訪れて文子に対応したことからは始まり、天達が釈放されるまでの約2年間の出来事について、文子が記録したものである。この男性の訪問を聞いた天達は、首をかしげて「刑事はよく朝早く来るが、一人で来ることはないんだが」と訝しみ、「内村鑑三さんは警察から調べに来ると、とても丁寧に扱ったそうだ。『あれも気の毒な人だ。悪い人でもないのに職務上しなければならないのだ』といってね」とポツリと言ったという²⁰⁾。天達は過去に労働運動やセツルメント活動で警察に連れていかれた経験があり、約半年前には社会事業研究所の同僚であった浦辺史が検挙されていたことから、虫の知らせがしたのである。また、この天達の言葉を聞いた文子も、文子が教えを受けた内村鑑三の言葉を天達がどこで見付けたのか知らないとした上で、この言葉が「これから先二年間の私の検察人に対する心構えの唯一の道標になる」とは知る由もなかったと述べている²¹⁾。天達の獄中での人間関係や、文子のかかわりについては、別稿で検討する予定であるが、実際に天達と文子が刑事

や看守らに丁重に接したことは、短歌や文子のノートからもうかがえる。

友人Uが天達の家を訪問した翌日、天達は社会事業研究所に出勤した後に、淀橋警察署に連行され、囚われの日々が始まった。東京女子大学で教員をしていた文子は、天達の検挙について大学当局に言うことができなかったため、教育、勤労作業、防空訓練など通常の生活の合間で天達のもとに差し入れや面会に行くという多忙な生活を送るようになった。また、文子は天達の父・弥七にも連絡を取り、一緒に天達のもとを訪れたり、防空壕を掘ったりしている。天達は1944年に喜寿を迎える高齢の父に対し、心配をかけていることを心苦しく思い、手紙でもそのことを詫言たり、父への思いを短歌で詠んだりしている。『幽囚の歌』の巻頭に、「わが囚はれ日の／ささへなりし／父と妻とにこれを献ぐ」とあるとおり、天達が生き延びられたのは、弥七と文子の物心両面での大きな支えがあつてこそであった。そして、文子のノートによって、戦争末期の社会状況や、「豚箱の歌」及び「独房の歌」に対する理解が一層深まるものとなっている。

以上が『幽囚の歌』の概要であるが、天達は「豚箱の歌」をのぞいて、「もともとはひとに一妻にも父にも一みてもらうためにつくられたものではありませんでした」とし、「露見の場合のことを考えて、ほんとうに記録したいことはさけて、記録しませんでした」とも述べている²²⁾。実際に、天達は巣鴨拘置所で「我がここにうたはぬうたこそ心からうたひたき歌真実のうた」と詠んでおり²³⁾、短歌として残せなかった思いも多々あったと思われる。それでも、病気で療養中だった文子によって編集され、『幽囚の歌』にまとめ

表1 『幽囚の歌』の概要

短歌	日付	場所	番号
四畳半のわが監房に十四の客人ありて寝るは苦しき	1943年12月29日	淀橋警察署	65
監房の共用タオルは垢じみてくさき匂ひを顔に残せり	1943年12月20日	淀橋警察署	34
監房の手拭よりも雪白のパンツぞ顔を拭くに適せり	1943年12月20日	淀橋警察署	35
生れきてはじめて下にはくものを顔拭く用にもちいたるかな	1943年12月20日	淀橋警察署	36
新入りは何時も便器のそばに寝ね気のどくながら我慢もならず	1943年12月20日	淀橋警察署	33
監房の我は主なる客人ら来りては去り来りては去る	1944年1月28日	淀橋警察署	131
監房に秘めす煙草を同囚ら我にもすへと出せばすひみる	1944年1月17日	淀橋警察署	119
許しなく手紙を出せし男あり残りし自由我も奪はる	1944年1月28日	淀橋警察署	132
我がここにうたはぬうたこそ心からうたひたき歌真実のうた	1944年10月26日	巣鴨拘置所	347

られた1,009首の短歌は、人間が豊かな人生を送るためには文化的な要素が欠かせないものであり、天達にとってはその1つが短歌であったことを示している。

歌人の小木宏は、『幽囚の歌』の中から55首を選んで紹介し、『幽囚の歌』のあとがきの「ある著名な歌人から出版をすすめられたこともありましたが、おことわりしてきました」という天達の言葉を引用した上で、「人の心を打つ作品が並んでいると筆者も思った」、「この本がより多くの人の目に触れること、短歌の持つ力ということを考えさせられた²⁴⁾と評価している。また、『幽囚の歌』の中から、『昭和萬葉集』の巻六に5首、巻七に1首が選ばれて掲載されている²⁵⁾。

2 生きがいとしての「短歌」

ここからは、『幽囚の歌』の短歌の分析を行う。『幽囚の歌』で複数回詠まれたテーマは、大きく分けて「短歌」、「花」、「食べ物」、「書籍」、「空襲」、「戦況」、「生」、「死」、「(同囚・看守・雑役等との)人間関係」、「父」、「母」、「妻」、「仕事」、「季節・自然」等である。本稿では、このうち「短歌」と「花」について取り上げる。

まず、『幽囚の歌』そのものと言える「短歌」について確認する。1943年12月13日、ちり紙に短歌を書き始めたその初日に、天達は「幽囚に絶えなるとする我が心温めむとて歌作りおり」、「歌作り歌作れども恨愁に崩れむとする我が心かな」と詠んでいる²⁶⁾。すなわち、囚われの身の天達は、自らの心を温め、励まそうとして短歌を作り始めたのであった。だが、慣れない監房の劣悪な環境下で、天達は熱を出して体調を崩したため、「歌の調べ」が拙くなることもあった²⁷⁾。そのような日々の中で、結婚記念日を迎えた天達は、「捕はれの身なれば贈るものもなし妻よ納めよ『幽囚

の歌』と詠んでいる²⁸⁾。その後、検挙から約2か月が経った頃には、こっそりと新聞を読むことができるようになったため、短歌を作る機会は減っていった²⁹⁾。

そして1944年5月29日に、天達は巣鴨拘置所に移され独房に入り、9月になって前述したような「印刷」を考案した。天達は「うた作り始めし日より捕はれの時の歩みは早くなりたり」、「我がうたの泉涸れなば捕はれの暮しは如何にかなしからまし」と詠み、短歌を作ることが生きがいになっている様子がうかがえる³⁰⁾。また、「玄米の粘気は強し麦よりも外米よりも歌貼るによし」と、歌を貼るのには玄米が適していることもわかり³¹⁾、10月25日にはその作業を初めて「印刷」と表現した³²⁾。同じ頃、天達は文子らへの葉書の端にも短歌を書いたが、検閲の際に抹消されていたことから、短歌を「印刷」する作業に専念することとなった³³⁾。

だが、「印刷」が軌道に乗ってきたこの秋の頃は、日の入りの時間が早まる時期であり、夕食の後では「印刷」作業ができなくなっていた³⁴⁾。そして、秋が深まり「印刷」が思うように進まなくなる中で、天達の気持ちは沈み、体調も悪化した。そのため、11月4日には病舎に移され、11月10日には、「わき出るは悲しみの歌、怒りの歌、この頃の歌はしるす気もせず」、「うたつくる代りにふてねして暮す哀れなる我となりにけるかな」と、生きがいである短歌を作る気にもなれない状況となっていた³⁵⁾。11月30日付の弥七と文子宛ての手紙には、「今月初め病室に移って以来、一度もお医者さんにお目にかかりません」とある³⁶⁾。『幽囚の歌』は全体を通して、苦しい生活の中でもできるだけ楽観的に物事をとらえようとする天達の様子が多々見られるが、それでも時に感情の浮き沈みはあ

り、この時期には医者診察も受けられず体調不良も相まって気力を失いつつあったのであろう。

そのような日々の中でも、病舎においては雑役が親切にしてくれることも多く、それまでとは異なった環境に少しずつ慣れていき、天達は「歌はしるす気もせず」となった後も短歌を作り続け、12月19日には「なかなかにはせはしかりけり歌作り歌貼りをればものもおもはず」と、再び「印刷」作業に追われるようになっていた³⁷⁾。そして、1945年1月2日には、「明日しれぬ命なれども歌作るかなしき^{あす}習ひ棄てかぬるかな」、「歌作り溜むれど歌は日の目見ることありやなしやしるべくもなし」と、検挙されてから2度目の正月を獄中で迎え、今後の見通しが立たない中で、それでも歌を作り続けている自らとその短歌について改めて考えるに至っている³⁸⁾。

その後、天達は2月1日に「突然病舎を出されて前の生活に復帰」という形で、再び独房での生活が始まった³⁹⁾。独房の寒さに耐え、3月になると「あかるき雀の歌声」を寝ながら聞くこともあった⁴⁰⁾。このよ

うに、『幽囚の歌』には短歌だけでなく、鳥や虫の鳴き声や、人の歌声などの「歌」についても時々取り上げられている。

天達の「印刷」は順調に進められていたが、5月になって雑役に「印刷」をとがめられるという危機もあった⁴¹⁾。『幽囚の歌』のあとがきに、短歌が「発見されそうになったことは一度しかありませんでした」とあるが、その「一度」とはこの時のことであろう⁴²⁾。このような危機がありながらも、「我が歌は捕はれの日の花と塩歌つくりをれば心たらへり」と、天達にとって、短歌を作ることは自らの心を落ち着かせ自らを喜ばせるために重要なことであり、やめるという選択肢はなかった⁴³⁾。

1945年の夏になると、ノミや蚊に悩まされつつ、「夜は蚊と戦ひ朝はうたたねし昼は歌作るこの頃の我」という生活をおくようになった⁴⁴⁾。そして、敗戦の報を聞き、天達は「戦ひは突如終りぬ^あ吾を繋ぐ鎖も突如断たれぬものか」と釈放されることを願いつつ⁴⁵⁾、「昼も夜も昨日も今日もわが胸に明るき歌の調べ絶え

表2 生きがいとしての「短歌」

短歌	日付	場所	番号
幽囚に絶えなんとする我が心温めむとて歌作りおり	1943年12月13日	淀橋警察署	3
歌作り歌作れども悵愁に崩れむとする我が心かな	1943年12月13日	淀橋警察署	4
獄に病めば歌の調べも拙 ^{つたな} かり生命の波の低まりぬべし	1943年12月19日	淀橋警察署	25
捕はれの身なれば贈るものもなし妻よ納めよ『幽囚の歌』	1943年12月24日	淀橋警察署	50
監房で新聞などを秘め読めば歌作ることすくなくなりぬ	1944年1月14日	淀橋警察署	114
うた作り始めし日より捕はれの時の歩みは早くなりたり	1944年9月14日	巣鴨拘置所	223
我がうたの泉涸れなば捕はれの暮しは如何にかなしからまし	1944年9月14日	巣鴨拘置所	224
玄米の粘気 ^{ねばけ} は強し麦よりも外米よりも歌貼るによし	1944年10月17日	巣鴨拘置所	315
うた数多作りたりせば「印刷」に追はれ追はれて本も読まざり	1944年10月25日	巣鴨拘置所	344
歌三つ葉書の端に書きたるにまたも消さると妻がたよりす	1944年10月22日	巣鴨拘置所	330
秋の日はいよ短く晩飯 ^{ばんめし} のあとで我が「うた」貼れずなりたり	1944年10月30日	巣鴨拘置所	382
わき出るは悲しみの歌、怒りの歌、この頃の歌はしるす気もせず	1944年11月10日	巣鴨拘置所	420
うたつくる代りにふてねして暮す哀れなる我となりにけるかな	1944年11月10日	巣鴨拘置所	421
なかなかにはせはしかりけり歌作り歌貼りをればものもおもはず	1944年12月19日	巣鴨拘置所	511
明日 ^{あす} しれぬ命なれども歌作るかなしき ^{なら} 習ひ棄てかぬるかな	1945年1月2日	巣鴨拘置所	552
歌作り溜むれど歌は日の目見ることありやなしやしるべくもなし	1945年1月2日	巣鴨拘置所	553
春の朝のあかるき雀の歌声を獄のベッドに寝ねて聞きをり	1945年3月15日	巣鴨拘置所	630
我が歌の印刷中を今日つひにかの雑役にとがめられたり	1945年5月6日	巣鴨拘置所	683
我が歌は捕はれの日の花と塩歌つくりをれば心たらへり	1945年7月4日	巣鴨拘置所	745
夜は蚊と戦ひ朝はうたたねし昼は歌作るこの頃の我	1945年7月20日	豊多摩刑務所	825
戦ひは突如終りぬ ^あ 吾を繋ぐ鎖も突如断たれぬものか	1945年8月15日	豊多摩刑務所	931
昼も夜も昨日も今日もわが胸に明るき歌の調べ絶えざる	1945年8月20日	豊多摩刑務所	948

ざる」と前向きに生きようとする気持ちを詠んでいる⁴⁶⁾。

以上のように、天達にとって短歌は、生きるために欠かせない大切なものであり、「印刷」に使用すれば食べられる米粒が減ってしまうということを知りながらも、その作業を続けた。天達は検挙される前、初めて公刊された論文の中で、社会事業において「経済的物質的扶助と共に文化的精神的要素の重要性が忘れられてはならない」と論じ⁴⁷⁾、その後も人間の生活において文化や精神的側面を大切に必要性について言及していたが、まさに肉体を維持するための糧である米粒を使ってでも精神的に自らを支え、励まそうとして短歌を「印刷」したのであった。

3 心身を支えた「花」

天達は兵庫県の但馬で生まれ育ち、幼い頃から自然と触れ合ってきたこともあり⁴⁸⁾、花や植物についても関心が高く、『幽囚の歌』でも花について積極的に詠んでいる。ここでは、「豚箱の歌」と「独房の歌」に出てくる花（木など植物も含む）の短歌について確認する。

(1) 「豚箱の歌」における「花」

「豚箱」、すなわち監房内は、常に密集状況であり、花を飾ることはできなかった。そのため、「豚箱の歌」に出てくる花の多くは、特高室など監房の外に飾られ

ていたものか、野外に咲いているものである。「豚箱の歌」において、最初に出てくる花は山茶花であり、これは文子が持参したものであった。家の庭に咲いていたその山茶花の香りを、天達はそっとかいでいる⁴⁹⁾。また、天達は1944年の正月を淀橋警察署で迎えたが、文子は年明けに梅の花を持参しており、「わが妻が持ちきし梅の香をかげばわが魂は広き野をゆく」と、囚われの身ながらも、天達は梅の香りをかぐことによって、魂が野をかける瞬間を感じていた⁵⁰⁾。他方で、日ごろから花に接していた天達にとって、花は日常生活を思い出させるものでもあり、「水仙の花はさやけし、書齋にて書をよみながら茶などのみたし」、「矢車草、スキートピーやフリジヤの花束みれば家に帰りたし」と、時に「外」での生活を恋しく思うこともあった⁵¹⁾。

留置場及び拘置所の冬の寒さはしばしば指摘されることであるが⁵²⁾、天達も「花開き鳥の唄へる春の野を酷寒の夜の獄に夢みき」と春が来るのを待ちわびている⁵³⁾。しかしながら、春の気配が訪れた頃には、未だ解き放たれない自らの身の上について、「菜の花と桃の花咲く青空の春来れども我は解かれず」と嘆いている⁵⁴⁾。その後、3月になると姫桜が特高室に飾られ⁵⁵⁾、4月には柳の芽が吹きそめる様子を看守が語っているが⁵⁶⁾、1944年4月15日に32歳の誕生日を監房で迎えた天達は、「桜花咲く春の日を監房に侘び暮す

表3-1 「豚箱の歌」における「花」

短歌	日付	場所	番号
特高の部屋の机に山茶花の花插されたり冬来るらし	1943年12月23日	淀橋警察署	48
薄紅の山茶花の花はわが妻が持来しといふ、そとかいでみる	1943年12月23日	淀橋警察署	49
わが妻が持ちきし梅の香をかげばわが魂は広き野をゆく	1944年1月8日	淀橋警察署	108
水仙の花はさやけし、書齋にて書をよみながら茶などのみたし	1944年1月8日	淀橋警察署	109
矢車草、スキートピーやフリジヤの花束みれば家に帰りたし	1944年2月11日	淀橋警察署	151
花開き鳥の唄へる春の野を酷寒の夜の獄に夢みき	1944年1月28日	淀橋警察署	133
菜の花と桃の花咲く青空の春来れども我は解かれず	1944年2月29日	淀橋警察署	161
姫桜咲ける鉢をば特高の部屋に飾れる春は来にけり	1944年3月12日	淀橋警察署	167
柳の芽吹きそめたりと監房の鍵鳴らしつつ看守語りぬ	1944年4月3日	淀橋警察署	168
桜花咲く春の日を監房に侘び暮すとははからざりけり	1944年4月15日	淀橋警察署	172
配給の野菜なければ ^{たんぽぽ} 蒲公英とあざみ摘めりと弁当に入りぬ	1944年4月20日	淀橋警察署	177
鉄窓の前の ^{あざり} 梧桐紅き芽を出せる五月となりけるかな	1944年4月20日	淀橋警察署	176
鉄窓をへだてて桐の木と語る捕はれし ^あ 吾は心さやけし	1944年5月18日	淀橋警察署	187
桐の木の語るをきけば捕はれの ^あ 恨ひ忘るる初夏の宵	1944年5月18日	淀橋警察署	188
風光る五月の庭のリウの花その小枝をば ^め 瞳をとちて嗅ぐ	1944年5月6日	淀橋警察署	181
リウの花白きをみれば風薫る五月の野辺のしのばるるかな	1944年5月6日	淀橋警察署	182

とははからざりけり」と、思いもかけず留置場での暮らしが長引いていることを憂いていた⁵⁷⁾。

また、同じ頃に、配給の野菜がなかったとして、天達はお弁当箱に入った蒲公英とあざみを受け取っている⁵⁸⁾。これは文子が持参したものであろうが、食糧事情が一層厳しくなっている様子がうかがえる。4月から5月にかけては、鉄窓の前の梧桐の芽を眺めたり⁵⁹⁾、時には桐の木と語りあったり⁶⁰⁾、庭のリラの花の香りを楽しんだりすることもあった⁶¹⁾。

(2)「独房の歌」における「花」

次に、「独房の歌」における「花」について確認する。前述したとおり、「独房の歌」には天達が淀橋警察署から巣鴨拘置所へ移った後に書かれた手紙が掲載されているが、1944年7月15日付の弥七と文子宛ての手紙には、「八日には花を買うことができて素晴らしかったです。百日草、白粉草、マーガレット、黄金色の栗みtainな花、ルピナスのように臺を立てたような匂いのよい花等々で、あかず眺め暮しています」とある⁶²⁾。前日の7月7日に巣鴨拘置所に来て独房に入った天達にとって、早いタイミングで花を買えたことは幸運であった。拘置所においては、「雑品購入日」があり、時に品切れのこともあったようだが、各種栄養剤、肝油、花などを買うことができた。そのため、天達は度々花を購入し、短歌にも繰り返し詠んでいる。

「独房の歌」における花をテーマとした初めての短歌は、1944年9月16日の「萩、紫苑、けいとうの花、女郎花」であり、秋の花について詠まれている⁶³⁾。これらの花の香りに包まれて本を読むことで、天達は独房での生活を楽しもうとしていた⁶⁴⁾。10月になると、「片割の昼の月あり嵐やみ桔梗の花の色に澄む空」と秋の空を眺め、「マーガレット、グラジオラスに赤きグリア蕾ばかりの百合も買ひたり」と新たな花も買い求めている⁶⁵⁾。また、独房に飾った白菊が、歌い、語りかけてくる様子も描かれている⁶⁶⁾。

そして同じ頃、天達は「花のごと野の花の如く生きなむとかく思ひをり独房に座し」と詠んでいる⁶⁷⁾。天達は、この歌の「野の花」は、厳密な意味では野の花ではないとし、次のような説明を行っている。独房には、床から約1メートルのところに通風のために30センチ四方くらい動く小さい四角のガラス窓があり、窓の下を眺めることができた。当時は食糧を確保すべく、建物と建物の間にも野菜がうえられていたが、ある日、この庭の菜を雑役たちが収穫し、育ちそこねて

使いものにならないようなものが、ひきぬかれたまま棄てられていた。何日か後に窓から下を見ると、うち棄てられたものが小さな花を咲かせていた。これを見つけた天達は、「ひよわでひげのような根が何本か黒い土にしがみついていた。『生きる』ということの厳粛さとすばらしさとにあらためて、えりをただす思いでした」として、このような歌を詠んだのである⁶⁸⁾。役に立たないと棄てられ、顧みられることのない植物が小さな花を咲かせ、必死に生きようとする姿に、天達は自らの人生を重ね合わせたのであった。

また、10月28日には、茶の花と菊を買い、「茶の花は父と暮せし加賀の国の山の畑に咲ける花なり」と、父とともに石川県で暮らした頃の思い出を振り返っている⁶⁹⁾。この日に天達は12首の短歌を詠んでいるが、そのうち10首は買った花についての歌であり、花を買えたことがよほど嬉しかったのであろう。「花はよし花を飾れば濁りたる心は澄めり魂もめざめき」と、花を飾ることで天達の心は安らぐと同時に⁷⁰⁾、検挙される前の娯楽での暮らしでは花を眺める余裕もなかった、と自身のこれまでの生活を振り返っている⁷¹⁾。「花買ふといふ贅沢は人間の持つ贅沢の最大のもの」であり⁷²⁾、天達は独房で人間の持つ「最大の贅沢」をしていたのであった。

他方で、同じ日に天達は「金色の菊の花びら飯にかけ食へば楽しき獄の食事」と詠み⁷³⁾、翌朝には汁に菊の葉を浮かべて、「ほろ苦き味」、「秋空の味」を食している⁷⁴⁾。花は愛でるためのものだけではなく、食べ物としての役割をも果たすようになっていた。この時の菊と同じ菊かは明確ではないが、その後12月3日には、「朝な朝なつんでは食べし菊の葉も花も残らず平らげにけり」と、菊の葉も花もすっかり食べきった様子が描かれている⁷⁵⁾。

天達は検挙される前年まで、社会事業研究所において農村社会事業や保健婦についての研究を行っており、1942年に東北の2か所の農家で行った調査では「家族の概況」、「居住状況」とともに、「食事献立」について詳しく調べている。そこでは、1か月間の三食の献立をすべて調べた上で、たとえば副食や味噌汁の中身について、植物性のものと動物性のものの割合がそれぞれのくらいあるのかについて論じるなど、栄養学的な視点から分析を行っていた⁷⁶⁾。このことから、天達にはある程度の栄養学に関する知識があり、菊の葉や花がカロリーを満たすものではないことは十分承知していたと思われる。それでも、菊の花をご飯

にかけて色を楽しみ、菊の葉を咀嚼して苦みを味わい、わずかばかりの栄養素を吸収しながら、飢えを凌ぎ、生きるために食べる量を少しでも増やそうと努力していた。花はどちらかというと天達を精神的に支えたものであったが、食糧事情が困難となる中で、時には食の面から天達を支えることもあった。

その後も天達は、うめもどき、菊の花、水仙、カーネーションについて詠み⁷⁷⁾、1944年の大みそかには「赤き実のなれる南天五葉の松などを飾りて正月を待つ」ことになった⁷⁸⁾。年が明けた1945年2月には、まだ寒さが厳しい中で、沈丁花の蕾がふくらむ様子を詠んでいる⁷⁹⁾。そして3月10日の東京大空襲の日、水も出ずお湯の配給もない中で、天達は花びんの水を

少し飲んでいる⁸⁰⁾。花を飾っていたことによって、天達は喉の渇きを癒すことができたのであった。

その後も天達は桃の花を飾ったり⁸¹⁾、桜の花を摘んでかじって「桜んぼのさやかな香り」を味わったり⁸²⁾、外のつつじ⁸³⁾や紫陽花を眺めたりしている⁸⁴⁾。7月7日に巣鴨拘置所から豊多摩刑務所に移送される際には、トラックの中から空襲で焼けた木立や畑を眺めつつ、焼け残った家の傍に咲いていた月見草と葵の花を見ることができた嬉しさを詠んでいる⁸⁵⁾。だが、豊多摩刑務所に移ってからは、花を買うことはできなかったようで、天達は8月13日付の弥七と文子宛ての手紙で、「お金は不要です。今では、弁当も花も何も買えませんから、持っていて何にもならないので

表3-2 「独房の歌」における「花」

短歌	日付	場所	番号
萩、紫苑、けいとうの花、女郎花、かざりて野辺の秋を偲べり	1944年9月16日	巣鴨拘置所	234
秋の花のほのかなる香に包まれて書をひもとけば獄もたのしき	1944年9月17日	巣鴨拘置所	235
片割の昼の月あり嵐やみ桔梗の花の色に澄む空	1944年10月9日	巣鴨拘置所	287
マーガレット、グラジオラスに赤きダリア蕾ばかりの百合も買ひたり	1944年10月10日	巣鴨拘置所	289
秋の風いぶせき獄に白菊の花を飾りて独りたのしむ	1944年10月15日	巣鴨拘置所	305
白菊の花は歌ひぬ白菊の花は語りぬ独房の吾に	1944年10月15日	巣鴨拘置所	306
花のごと野の花の如く生きなむとかく思ひをり独房に座し	1944年10月15日	巣鴨拘置所	308
つぶらなる白き茶の花赤と黄の香りもたかき菊を買ひたり	1944年10月28日	巣鴨拘置所	358
茶の花は父と暮せし加賀の国の山の畑に咲ける花なり	1944年10月28日	巣鴨拘置所	359
花はよし花を飾れば濁りたる心は澄めり魂もめざめき	1944年10月28日	巣鴨拘置所	363
しみじみと花を眺めてふりかへる娑婆の暮しは忙しかりけり	1944年10月28日	巣鴨拘置所	365
かくまでに心しづかに花を見ることもなかりし娑婆の暮しぞ	1944年10月28日	巣鴨拘置所	366
花買ふといふ贅沢は人間の持つ贅沢の最大のもの	1944年10月28日	巣鴨拘置所	364
金色の菊の花びら飯にかけ食へば楽しき獄の食事も	1944年10月28日	巣鴨拘置所	367
菊の葉を汁に浮べて秋深き独房に食ふ朝の飯かな	1944年10月29日	巣鴨拘置所	369
汁の実の大根と食ふ菊の葉はほろ苦き味秋空の味	1944年10月29日	巣鴨拘置所	370
朝な朝なつんでは食べし菊の葉も花も残らず平らげにけり	1944年12月3日	巣鴨拘置所	455
うめもどき、菊の花なぞ飾りしに我が病室もうるほひにけり	1944年11月17日	巣鴨拘置所	427
戦ひの冬の獄屋に水仙とカーネーションの花めづるとは	1944年12月17日	巣鴨拘置所	494
赤き実のなれる南天五葉の松などを飾りて正月を待つ	1944年12月31日	巣鴨拘置所	540
雪氷とぞせる冬と思ひしがはや沈丁花の蕾きざせり	1945年2月3日	巣鴨拘置所	578
水も出ず湯の配給もなき今朝は花びんの水をすこし飲みたり	1945年3月10日	巣鴨拘置所	621
桃の花一つ咲きけり七日前蕾のままにビンにいけしが	1945年3月30日	巣鴨拘置所	642
桜んぼのさやかな香り流れけり桜の花を摘みて噛みしに	1945年4月5日	巣鴨拘置所	651
獄の庭の日蔭に生ゆるつつじにも花咲きにけり夏きたるらし	1945年4月17日	巣鴨拘置所	675
紫陽花の花咲きにけり牢獄の荒れたる庭に梅雨けむりて	1945年6月21日	巣鴨拘置所	721
月見草と葵の花とをチラと見て嬉しかりけり残りし家に	1945年7月7日	豊多摩刑務所	768
陽を受けて風にそよげる桐の葉が我が唯一の慰めの友	1945年7月11日	豊多摩刑務所	782
蒼茫と暮れゆく秋の宵風を獄の高窓の桐の葉に見る	1945年9月18日	豊多摩刑務所	994

す」と知らせている⁸⁶⁾。敗戦間際のこの時期、食糧はもちろん、花も含めて刑務所の中で購入できるものは、もはや1つもなかったのである。天達は淡々とした表現で手紙を書いているが、花が買えないということは独房での数少ない楽しみを奪われることであり、非常につらい日々が続いていたことであろう。そのため、豊多摩刑務所においては、「陽を受けて風にそよげる桐の葉が我が唯一の慰めの友」であった⁸⁷⁾。ただ、この手紙を書いた2日後に戦争が終わったことにより、天達が釈放への希望を現実的なものとして考えられるようになったのは幸いであった。敗戦後も物資の不足は解消されず、花を買うことはできなかったが、花ではなく窓から見える桐の葉について詠みながら⁸⁸⁾、天達は釈放の日を待ち続けていた。

以上が「独房の歌」に詠まれた「花」の歌である。監房とは異なり、話し相手のいない独房では、花は孤独を和らげてくれる存在であった。そして、敗戦直前から戦後の時期を除き、囚われていた期間を通して天達は花と親しく接し、花によって視覚、嗅覚、時には多少の味覚も満たされていた。短歌の「印刷」は秘密裏に行わなくてはならなかったが、花はそのような気遣いをせずとも飾ることができたため、短歌とは別の意味で、花は天達を精神的に大きく支えていたのである。

おわりに

本稿では『幽囚の歌』の概要を述べた上で、『幽囚の歌』に詠まれたテーマのうち、「短歌」と「花」について確認を行った。短歌の作り方については、監房では万年筆でちり紙に書き、独房では週刊誌の文字を切り取って紙に貼るという形で異なっていたが、いずれにしても短歌は天達にとって心を温め、励ますものであった。また、その短歌の題材ともなった花も、天達の人生にとって欠かせないものであり、花を買うという人間の持つ「最大の贅沢」をすることによって、生活に潤いを与えることが可能となった。このように、天達は監房や独房において、ささやかな楽しみを見つけて生活に張り合いを持たせ、自らを鼓舞しつつ、命をつなごうとしていた。

付記

本研究は JSPS 科研費 20K02297 の助成を受けた研究成果の一部である。

註

* 愛知県立大学教育福祉学部准教授

- 1) 気胸療法の後遺症により、1964年4月から仕事を休んでいた文子は、その間に『幽囚の歌』をまとめる作業を行った。文子は実弟三谷宗二郎への手紙に、「この春以来やった仕事の一つは天達が戦時中二ヵ年拘置されていた間にひそかに作った和歌九百首整理したことです」と書いている。天達文子先生記念会編(1989)『天達文子遺稿・追想集』、280。ただし、『幽囚の歌』に掲載された短歌に便宜上の番号を振って数えたところ、「豚箱の歌」195首、「独房の歌」814首の合計1,009首と一千を超えていた。そのため、本稿では、合計1,009首という数を使用している。なお、手紙及び文子のノートに出てくる短歌、「豚箱の歌」にある短歌の形式ではない詩については上記の1,009首に含めていない。
- 2) この検挙の経緯については、渡邊かおり(2019)「社会事業研究所所員が検挙された背景に関する考察—秋田県旭村における農村調査との関係—」『社会事業史研究』56、121-134頁、を参照。
- 3) 天達忠雄(1965)『幽囚の歌』247
- 4) 註には、「表1、35」(表1に掲載した『幽囚の歌』で35番目に詠まれた短歌を意味する)のような形で表記する。
- 5) 風早八十二(1990)『「限界状況」下のヒューマニスト像—天達君の貴重な遺産『幽囚の歌』—』天達玲子編『天達忠雄追悼文集』263
- 6) 表1、65
- 7) 風早八十二、前掲註5)、262
- 8) 表1、34~36
- 9) 表1、33
- 10) 風早八十二、前掲註5)、263
- 11) 表1、131
- 12) 表1、119
- 13) 表1、132
- 14) 「独房の秋」には1944年9月6日から11月10日まで、「凍る鉄窓」には1944年11月17日から1945年3月27日まで、「繋がれし春」には1945年3月30日から6月25日まで、「死の家」には1945年6月26日から9月27日までの短歌が収められている。
- 15) 天達が起訴された際の「犯罪事実」は、「浦辺史、重田信一等の同僚共産主義者と左翼グループを形成」した上で、(1)「社会事業の本質を左翼的な生活指導に在りと主張すると共に之を機関紙『社会事業』等に執筆掲載せしめ大衆の左翼的啓蒙を行」ったこと、(2)「浦辺、重田等と共に左翼的保健婦、保母等を糾合して『農村厚生研究所』なる左翼グループを形成する等の活動を行なしたる」こと、というものであった。内務省警保局保安課

- 編 (1944)『特高月報 (昭和19年7月分)』内務省警保
局保安課、14-15。ただし、この月報において天達忠雄
の名前は「天達忠樹」と誤記されている。
- 16) 天達と同様に敗戦を豊多摩刑務所の独房で迎えた内山
弘正は、巣鴨拘置所および豊多摩刑務所を比較し、巣鴨
と豊多摩の独房は同じ三畳の広さで、豊多摩は畳がなく
板の床で、ベッドがあったと説明している。内山弘正
(1986)「敗戦時の豊多摩刑務所」豊多摩 (中野) 刑務所
を社会運動史的に記録する会編『獄中の昭和史—豊多摩
刑務所—』青木書店、118。これに対し、天達は豊多摩
刑務所に着いた初日に、「寝台も畳もなく板の間に煎
餅ぶとんを敷きて寝るかな」と豊多摩刑務所にベッドが
ないことについて詠んでいる。
- 17) 天達忠雄、前掲註3)、41
- 18) 天達文子先生記念会編、前掲註1)、280。
- 19) 巣鴨拘置所から豊多摩刑務所に移されたのは、予審手
続きが進んだためではなく、空襲によって焼けた裁判所
や司法省が、焼け残った巣鴨拘置所の建物を使うことにな
ったためであった。よって、豊多摩刑務所は豊多摩
(仮) 拘置所とも呼ばれていた。
- 20) 天達忠雄、前掲註3)、219
- 21) 同上、219
- 22) 同上、245
- 23) 表1、347
- 24) 小木宏 (2006)『囚われて短歌を遺した人びと』本の
泉社、139、148
- 25) 太田青丘ほか選 (1979)『昭和萬葉集 巻六』講談社、
214-215、及び太田青丘ほか選 (1979)『昭和萬葉集 巻
七』講談社、19
- 26) 表2、3~4
- 27) 表2、25
- 28) 表2、50
- 29) 表2、114
- 30) 表2、223~224
- 31) 表2、315
- 32) 表2、344
- 33) 表2、330
- 34) 表2、382
- 35) 表2、420~421
- 36) 天達忠雄、前掲註3)、99
- 37) 表2、511
- 38) 表2、552~553
- 39) 天達忠雄、前掲註3)、129
- 40) 表2、630
- 41) 表2、683
- 42) 天達忠雄、前掲註3)、245
- 43) 表2、745
- 44) 表2、825
- 45) 表2、931
- 46) 表2、948
- 47) 天達忠雄 (1937)「学窓に反映せる日本社会事業の相
貌」『社会事業』21(8)、14-15
- 48) 天達忠雄 (1979)「社会科から社会学部へ—1教員の
年代記メモ」明治学院大学社会学部50周年記念事業委
員会『記念樹とともに—明治学院大学社会学部50周年
特集』209
- 49) 表3-1、48~49
- 50) 表3-1、108
- 51) 表3-1、109、151
- 52) 森源 (1981)「教科研でブタ箱ぐらし」「赤旗」社会部
編『証言 特高警察』新日本出版社、161、浪江虔
(1986)「懲役の冬・箱かつぎ修業」豊多摩 (中野) 刑務
所を社会運動史的に記録する会編『獄中の昭和史—豊多
摩刑務所—』青木書店、110-112、NHK「ETV 特集」取
材班 (2019)『証言 治安維持法—「検挙者10万人の記
録」が明かす真実—』NHK 出版、226、など。
- 53) 表3-1、133
- 54) 表3-1、161
- 55) 表3-1、167
- 56) 表3-1、168
- 57) 表3-1、172
- 58) 表3-1、177
- 59) 表3-1、176
- 60) 表3-1、187~188
- 61) 表3-1、181~182
- 62) 天達忠雄、前掲註3)、44
- 63) 表3-2、234
- 64) 表3-2、235
- 65) 表3-2、287、289
- 66) 表3-2、305~306
- 67) 表3-2、308
- 68) 天達忠雄、前掲註3)、246-247
- 69) 表3-2、358~359
- 70) 表3-2、363
- 71) 表3-2、365~366
- 72) 表3-2、364
- 73) 表3-2、367
- 74) 表3-2、369~370
- 75) 表3-2、455
- 76) 天達忠雄 (1943)「社会事業研究所 東北農村調査報
告 (VI) 東北農村生活片々」『厚生問題』27(12)、50-
57、65-73
- 77) 表3-2、427、494
- 78) 表3-2、540

79) 表3-2、578

80) 表3-2、621

81) 表3-2、642

82) 表3-2、651

83) 表3-2、675

84) 表3-2、721

85) 表3-2、768

86) 天達忠雄、前掲註3)、197。なお、この手紙を文子が

受け取ったのは、敗戦からひと月以上が過ぎた1945年
9月16日であった。

87) 表3-2、782

88) 表3-2、994。桐及び梧桐については、「豚箱の歌」で
3首、「独房の歌」で9首詠まれている。そして「独房
の歌」の9首のうち、6首は豊多摩刑務所で作られたも
のであり、花が買えなくなった天達にとって、外に見え
る桐はまさに「唯一の慰めの友」であった。